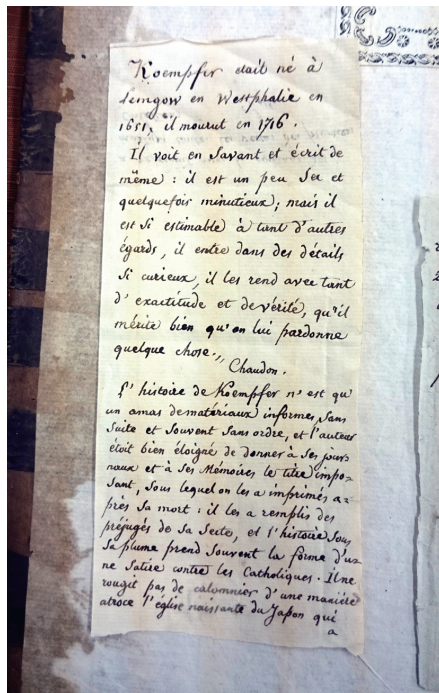




ケンペル『日本史』の口絵



表紙裏の貼紙

エンゲルベルト・ケンペル『日本史』フランス語初版所収

Engelbert Kaempfer, *Histoire naturelle, civile, et ecclesiastique de l'empire du Japon*.
A La Haye : Chez P. Gosse, & J. Neaulme, 1729.

1690年代に日本に滞在し、日本側史料や東インド会社の史料を基に日本文化を綿密に研究したケンペルが著した『日本史』は、1727年にロンドンで出版されてから、ヨーロッパにおいて日本学の基本的参考書となった。1729年にはフランス語版も世に出て、フランス語圏の知識人の間に広い読者層を獲得し、その影響は、特に啓蒙主義者たちの間に広まり、宗教や国政、政治などの日本学を越えた分野における学術的な議論にまで展開した。しかし一方で、16世紀のイエズス会士の報告集を情報源としたシャルヴォアを筆頭とするカトリック著者からは、ケンペルの非カトリック的観点が批判の標的となった。このような批判は、日文研所蔵の『日本史』フランス語初版の書き込みからも確認することができる。同書の表紙裏の貼紙に「彼はそれらに自分の宗派の偏見を盛んに織り込み、彼の執筆した日本史は度々カトリックに対する風刺の形を取っている」等とある。この記述からは、イエズス会士の報告集を元とするカトリック型の日本学とオランダ商館を媒介とするプロテスタント型の日本学が互いに平行線を辿り、日本学は当時、イデオロギー的観点の影響力を排除できていなかったことが窺える。

(解説：フレデリック・クレインス)